

『日本アジア研究』第6号(2009年3月)

## 現代日本語の移動動詞と場所名詞の格

岡田幸彦\*

現代日本語において、移動動詞とともに用いられる場所名詞（以下、格の表示に際しては「場所」とする）の格のうち、移動の開始場所を表すのは「場所から」（『函館から くる』など）「場所を」（『教室を でる』など）、移動中の場所を表すのは「場所を」（『海岸通りを あるく』など）、移動の終了場所を表すのは「場所まで」（『小樽まで くる』など）「場所に/へ」（『家に/へ いく』など）、移動の目的地を表すのは「場所に/へ」（『宿に/へ むかう』など）である。これらの事実から、場所名詞の格のどのような相互関係、および、移動動詞の語彙的意味のどのような特性が明らかになるだろうか。

「場所から」は、結合相手の移動動詞に依存せずに移動の開始場所を表す。開始後の移動は線的にとらえられる。「場所を」は、結合相手の移動動詞に依存して出発地点あるいは経由地点を表す。出発あるいは経由は点的にとらえられる。これは結合相手の移動動詞の語彙的意味の特性の現れである。「場所まで」は、終了にいたる移動を線的にとらえることができる動詞とともに用いられ、移動の終了場所を表す。「場所に/へ」は、結合相手の移動動詞に依存して到着地点あるいは移動の目的地を表す。到着は点的にとらえられる。これも結合相手の移動動詞の語彙的意味の特性の現れである。

キーワード：移動動詞、場所名詞、格

### 1 移動と場所

#### 1.1 移動の開始場所・移動中の場所・移動の終了場所を表す場所名詞の格

現代日本語において、空間移動を表す動詞（以下「移動動詞」と呼ぶ）は、さまざまな格の場所名詞（以下「場所名詞」と呼び、その格は「場所を/に/へ/から/まで」と表記する）とともに用いられるが、どの格がどのような場所を表しているだろうか。

移動には、開始（出発）・中間（移動中）・終了（到着）という段階がある。それらと直接関係する場所として、移動の開始場所・移動中の場所・移動の終了場所がある、といえる。そこで、場所名詞のどの格が、移動の開始場所・移動中の場所・移動の終了場所のうちのどれを表しているのか、また、表される場所として上記以外に何があるかを、具体的な使用例からみってみる。

- (1) わたしたちは函館から小樽まで船で来たんですけど、わたしは船に弱くて酔いましてねえ。（『塩狩峠』231）

\* おかだ・ゆきひこ、埼玉大学大学院文化科学研究科博士後期課程在学中、言語学

例1『函館から 小樽まで くる』では、「函館から」が移動の開始場所を、「小樽まで」が移動の終了場所を表していて、「函館」において開始され、「小樽」において終了する移動が示されている。

(2) 郡司は、食堂から出て、トルコの海峡管制官が下りていったハッチまで行き、そこで立ちどまった。(『雲の宴・上』419)

例2『食堂から での』では、「食堂から」が移動の開始場所を表していて、「食堂」において開始される移動が示されている。

(3) 生徒全員が教室を出たと思っていたが、窓際が一番後ろの席に、一人の女生徒が残っている。(『幻世の祈り』90)

例3『教室を での』では、「教室を」が移動の開始場所を表していて、「教室」において開始される移動が示されている。

(4) 磨き終えた研司が、馬見原の前を通って、布団のほうへ進みかけ、寝室の手前でこちらを振り返る。(『幻世の祈り』62-63)

例4『馬見原の前を とおる』では、「馬見原の前を」が移動中の場所を表していて、「馬見原の前」において行われる移動が示されている。

(5) 郡司薫は、黒人たちが集る海岸通りを、端から端まで、歩いた。(『雲の宴・下』30)

例5『海岸通りを 端から 端まで あるく』では、「海岸通りを」が移動中の場所を、「(海岸通りの)端から」が移動の開始場所を、「(海岸通りの)端まで」が移動の終了場所を表していて、海岸通りの「端」において開始され、海岸通りのもう一方の「端」において終了する、「海岸通り」において行われる移動が示されている。

(6) あの雨の夜に、校庭の桜の木の下まで行ったのは、信夫と吉川だけであつた。(『塩狩峠』61)

例6『桜の木の下まで いく』では、「桜の木の下まで」が移動の終了場所を表していて、「桜の木の下」において終了する移動が示されている。

(7) 翌日、いつものように塾が終わると、昼食のパンを持って、ぼくたちはおじいさんの家に行った。(『夏の庭』150)

例7『おじいさんの家に いく』では、「おじいさんの家に」が移動の終了場所を表していて、「おじいさんの家」において終了する移動が示されている。

(8) 新幹線とフェリーに乗って島に着いたぼくたちは、バスで宿に向かっ

た。(『夏の庭』170)

例8『島に つく』では、「島に」が移動の終了場所を表していて、「島」において終了する移動が示されている。

(9) 隆士が来たころから、貞行は菊といっしょによく教会へ行っていた。(『塩狩峠』109)

例9『教会へ いく』では、「教会へ」が移動の終了場所を表していて、「教会」において終了する移動が示されている。

(10) なんの用意もなく研究所へ着いてしまうわけにもいかない。(『丘の上の向日葵』276)

例10『研究所へ つく』では、「研究所へ」が移動の終了場所を表していて、「研究所」において終了する移動が示されている。

(11) 新幹線とフェリーに乗って島に着いたぼくたちは、バスで宿に向かった。(『夏の庭』170)

例11『宿に むかう』では、「宿に」が移動の目的地を表していて、「宿」をめざす移動が示されている。

(12) 生徒たちが一斉に席を立ち、絵筆やパレットを洗うために隅の流し台へ向かった。(『幻世の祈り』88)

例12『流し台へ むかう』では、「流し台へ」が移動の目的地を表していて、「流し台」をめざす移動が示されている。

以上をもとに、移動動詞とともに用いられる場所名詞のどの格が、移動に関するどのような場所を表しているかをまとめる。

- ① 「場所から」 = 移動の開始場所 を表す  
(例1『函館から 小樽まで くる』例2『食堂から でる』例5『海岸通りを 端から 端まで あるく』から)
- ② 「場所を」 = 移動の開始場所 を表す  
(例3『教室を でる』から)
- ③ 「場所を」 = 移動中の場所 を表す  
(例4『馬見原の前を とおる』例5『海岸通りを 端から 端まで あるく』から)
- ④ 「場所まで」 = 移動の終了場所 を表す  
(例1『函館から 小樽まで 来る』例5『海岸通りを 端から 端まで あるく』例6『桜の木の下まで いく』から)
- ⑤ 「場所に」 = 移動の終了場所 を表す  
(例7『おじいさんの家に いく』例8『島に つく』から)

- ⑥ 「場所へ」 = 移動の終了場所 を表す  
 (例 9『教会へ いく』例 10『研究所へ つく』から)
- ⑦ 「場所に」 = 移動の目的地 を表す  
 (例 11『宿に むかう』から)
- ⑧ 「場所へ」 = 移動の目的地 を表す  
 (例 12『流し台へ むかう』から)

この対応関係を、移動に関するどのような場所を、場所名詞のどの格が表すか、という形でまとめなおすと、以下のようになる。

移動の開始場所を表す格は、「場所から」「場所を」2種類である。

移動中の場所を表す格は、「場所を」1種類である。

移動の終了場所を表す格は、「場所まで」「場所に」「場所へ」3種類である。

これらのうち、「場所に」と「場所へ」に関しては、例 7『おじいさんの家へ いく』は『おじいさんの家へ いく』に、例 8『島に つく』は『島へ つく』に、それぞれ言い換え可能であり、一方、例 9『教会へ いく』は『教会に いく』に、例 10『研究所へ つく』は『研究所に つく』に、それぞれ言い換え可能である。このように、移動の終了場所を表す「場所に」と「場所へ」は置き換え可能であるので、以下では、「場所に/へ」として一括して扱う。

以上のほかに、移動の目的地を表す格として、「場所に」「場所へ」2種類がある。例 11『宿に むかう』は『宿へ むかう』に、例 12『流し台へ むかう』は『流し台に むかう』に、言い換え可能である。このように、「場所に」と「場所へ」は、移動の目的地を表す場合にも、移動の終了場所を表す場合と同様、置き換え可能であるので、以下では、移動の目的地を表す場合にも、「場所に/へ」として一括して扱う。

移動の開始場所と移動の終了場所とが複数の格によって表し分けられているのに対し、移動中の場所を表す格、移動の目的地を表す格は、それぞれ 1種類ずつしかない。

では、ある移動動詞が、特定の格の場所名詞とともに用いられることから、その格の文法的意味について、および、移動動詞の語彙的意味の特性について、どのようなことが明らかになるだろうか。

## 1.2 先行研究

現代日本語において、特定の格の名詞と動詞との結合関係が、その動詞の語彙的意味(の特性)と密接に関係することは、奥田靖雄(1968-72)、宮島達夫(1972)、村木新次郎(1991)など、多数の研究によって紹介されている。

特定の格の名詞と動詞との結合関係について具体的で詳細な記述がなされているのは、奥田(1962, 1968-72)、渡辺友左(1963)、荒正子(1975, 1977)という、一連の「連語」研究である。奥田(1962: 291)は、「場所に」と移動動詞の結合について、「方向性をもった移動動詞」と「に格の名詞」のくみあわせによって「ゆくさきのむすびつきができる。」としている。渡辺(1963: 343)は、「方向性をもった移動動詞」と「へ格の名詞」のくみあわせによって「ゆくさきのむすびつきができる。」としている。また、奥田(1968-72: 140)は、「場所を」と移動動詞の結合について、「うつりうごくところ」「とおりにぬけ

るところ」「はなれるところ」という下位分類をおこなっている。荒（1975: 398-404）は、「から格の名詞」が「移動動作をしめす自動詞」とのくみあわせで「《出発点》あるいは《でどころ》」を、「移動動作を様態の側面からとらえる動詞」とのくみあわせで「《起点》あるいは《はじまり場所》」を表す、としている。また、荒（1977: 456-461）は、「まで格の名詞」が、「移動動作を方向性という観点からとらえている動詞」とのくみあわせで「移動の範囲」（条件によっては「移動のいきさき」）を、「移動動作を形態という観点からとらえている動詞」とのくみあわせで「《終点》」を表す、としている。

特定の格の場所名詞と移動動詞の結合を動詞の分析に応用した例として、ほかにも以下のような研究がある。

宮島（1972: 202）は、「経過点をあらわす目的語「～を」をとるかどうかが移動のどの「段階に重点をおいて表現しているか」の根拠の一つにあげている。

寺村秀夫（1982: 102-121）は、「移動の動詞」を「「特定化された」場所の表現と特に縁が深い」とし、「補語」が「仕手（X）→Xガ, 出どころ（Y）→Yヲ/Yカラ」である「「出ル」動き」,「補語」が「仕手（X）→Xガ, 通りみち（Y）→Yヲ, 出どころ（V）→Vカラ, 到達点（あるいは目的地）（W）→Wへ/Wニ」である「「通ル」動き」,「補語」が「仕手（X）→Xガ, 到達点（Y）→Yニ, 出どころ（Z）→Zカラ」である「「入ル, 着ク; 泊マル」類」,「補語」が「仕手（X）→Xガ, 到達点（あるいは目的地）（Y）→Yへ/Yニ, 出どころ（Z）→Zカラ, 通りみち（W）→Wヲ」である「行ク, 来ル, 帰ル, 戻ル」というグループをたてている。

村木（1991: 147）は、「名詞と動詞とのあいだになりたつ関係概念」を「叙述素」と呼び、「空間的起点」[ガ/ヲ, カラ]（「弟が 部屋から 出る」など）「空間的着点」[ガ/ヲ, ニ]（「父が 会社に 行く」など）「方向」[ガ/ヲ, へ]（「妻が 市場に 通う」など）（引用者注：以上の「ヲ」は他動詞の直接対象）「空間」[ガ, ヲ]（「みんなが 坂道を 登る」など）という「叙述素」をたてている。

今度は、格の相互関係についての研究をいくつかみってみる。

城田俊（1981）は、「助詞に後接される語（名詞）が示す事柄に、他の事柄（（中略）用言が示す動作・作用・状態・性質）が向けられていること」という「指向性」,「助詞に後接される語（名詞）が示す事柄が、他の事柄に対して周辺に位すること」という「周辺性」（「間接的」）,「用言の示す事柄は、（中略）体言の示す事柄の範囲（限界）内に存在するか、その範囲内に到達して」いる、という「範囲内性」、さらに「同列性」という4つの「意味上の特徴」を設定し、「ヲ」に「指向性」,「へ」に「指向性」と「周辺性」,「ニ」に「周辺性」と「範囲内性」,「カラ」に「指向性」と「範囲内性」、と「マデ」に「指向性」と「周辺性」と「範囲内性」をわりあてている。

村木（1991: 144-147）は、「構文のかなめとなり、主語や目的語の機能をはたす文法格」である「ガ, ヲ, ニ（与格）」,「広義の場所格」である「ニ（位格）, カラ, へ」,「抽象的な関係をあらわす関係格」である「ニ（依拠格）, ト, ヨリ」といった分類をおこなっている。

### 1.3 本稿の目的

奥田(1968-72)他の「連語」研究は、個別の格記述を目的としていて、個々の格と動詞との結合関係については詳細な記述がなされているが、格の相互関係については正面からとりあげられているわけではない。宮島(1972)他の研究においても、目的は動詞を中心とした個別の記述である。

一方、城田(1981)は、格の相互関係を直接の対象としているが、全体像を明らかにすることを目的としていて、名詞の格と動詞との結合関係が具体的にとりあげられているわけではない。

本稿では、現代日本語における、特定の格の場所名詞と移動動詞との結合関係を記述し、それぞれの格の文法的意味を検討することによって、移動動詞と結合している場所名詞の用法という範囲で、格のどのような相互関係が明らかになるのか、そして、移動動詞の語彙的意味のどのような特性が明らかになるのかをみていきたい。

## 2 移動の開始場所を表す「場所から」と「場所を」

1では、「場所から」「場所を」という2種類の格が移動の開始場所を表すことをみた。では、移動の開始場所が、「場所から」によって表される場合と、「場所を」によって表される場合とは、どのような違いがあるのだろうか。

### 2.1 移動の開始場所を表す「場所から」

はじめに、「場所から」が移動の開始場所を表している場合をみる。

「場所から」は、1の例1『函館から 小樽まで くる』例2『食堂から である』例5『海岸通りを 端から 端まで あるく』どの例においても、つまり、『くる』『である』『あるく』どの動詞とともに用いられている場合においても、移動の開始場所を表している。「場所から」は、どのような移動動詞とともに用いられても、移動の開始場所を表すのだろうか。「場所から」が上記以外の動詞とともに用いられている例をみってみる。

(13) 走って出てみると、父が車から降りるところだった。(『塩狩峠』32)

(14) 信夫は、三堀峰吉が給料紛失の犯人であることに気づいたが、三堀という人間が、このまま職場から去るのは憐れに思われた。(『塩狩峠』268)

例13『車から おりる』では、「車から」が移動の開始場所を表していて、「車」において開始される移動が示されている。例14『職場から さる』では、「職場から」が移動の開始場所を表していて、「職場」において開始される移動が示されている。これら2つの例から、「場所から」が『おりる』『さる』とともに用いられている場合にも、移動の開始場所を表すことがわかる。

さて、例2『食堂から である』例13『車から おりる』例14『職場から さる』は、「場所から」が単独で用いられている例である。一方、例1『函館から 小樽まで くる』では「場所まで」が「場所から」と共起しており、例5『海岸通りを 端から 端まで あるく』では「場所を」と「場所まで」が「場所から」と共起している。そこで次に、他の格の場所名詞が「場所から」と共起している例をみていく。

第1に、移動中の場所を表す「場所」を「場所から」と共起している例をあげる。上記の例5『海岸通りを 端から 端まで あるく』は、移動中の場所を表す「場所」を、および、移動の終了場所を表す「場所まで」が「場所から」と共起しているが、ここでは「場所」のみが「場所から」と共起している例をみる。

- (15) 学校に入るには、長い坂を登り、橋を渡って正面から入る方法と、駅から一直線に国道の下の川べりを通り、校庭の方からあまり使われていない崖下の細い階段を登っていく方法とがある。(『六番目の小夜子』292)
- (16) 英子の車は見付の方へ向うと、途中で左折して一ツ木通りから TBS のそばをぬけ、閑静な住宅街に入る。(『悪霊の午後・上』116)
- (17) 「そこから坂をおりて。……」(『丘の上の向日葵』148)
- (18) 大通りから坂を下って木造家屋のごたごた並ぶ界限に入ると、いつもなら「ごとごと・がたん」が聞えるのに、その日は妙に静まり返っていた。(『雲の宴・上』169)

例15では、「駅から」が移動の開始場所を、「川べりを」が移動中の場所を表して、『駅から 川べりを とおる』によって、「駅」において開始され、「川べり」において行われる移動が示されている。例16では、「一ツ木通りから」が移動の開始場所を、「TBSのそばを」が移動中の場所を表して、『一ツ木通りから TBSのそばを ぬける』によって、「一ツ木通り」において開始され、「TBSのそば」において行われる移動が示されている。例17では、「そこから」が移動の開始場所を、「坂を」が移動中の場所を表して、『そこから 坂を おりる』によって、「そこ」において開始され、「坂」において行われる移動が示されている。例18では、「大通りから」が移動の開始場所を、「坂を」が移動中の場所を表して、『大通りから 坂を くだる』によって、「大通り」において開始され、「坂」において行われる移動が示されている。

以上、例15-18では、『とおる』『ぬける』『おりる』『くだる』が用いられ、『場所①から 場所②を ~する』によって、場所①において開始され、場所②において行われる移動が示されている。

第2に、移動の終了場所を表す「場所」に/へ」が「場所から」と共起している例をあげる。

- (19) 食堂から廊下に出ると、すぐ右手にハッチがある。(『雲の宴・上』421)
- (20) その家から満州へ渡った。(『幻世の祈り』83)
- (21) たまたま、東京から札幌に来た年の冬、寒い街頭で路傍伝道をしている伊木という先生の話をおたくしは聞きました。(『塩狩峠』308)
- (22) 教師の吉田が先頭に立って、国道から河原へと降りる。(『六番目の小夜子』117)

例19では、「食堂から」が移動の開始場所を、「廊下に」が移動の終了場所を表して、『食堂から 廊下に 出る』によって、「食堂」において開始され、「廊下」において終了する移動が示されている。例20では、「その家から」

が移動の開始場所を、「満洲へ」が移動の終了場所を表している、『その家から満洲へ わたる』によって、「その家」において開始され、「満洲」において終了する移動が示されている。例 21 では、「東京から」が移動の開始場所を、「札幌に」が移動の終了場所を表している、『東京から 札幌に くる』によって、「東京」において開始され、「札幌」において終了する移動が示されている。例 22 では、「国道から」が移動の開始場所を、「河原へ(と)」が移動の終了場所を表している、『国道から 河原へ(と) おりる』によって、「国道」において開始され、「河原」において終了する移動が示されている。

以上、例 19-22 では、『でる』『わたる』『くる』『おりる』が用いられ、『場所①から 場所②に/へ ~する』によって、場所①において開始され、場所②において終了する移動が示されている。

さて、以下の例 23-27 では、『くる』『かえる』『あがる』『はいる』『のる』が『場所から ~する』という結合において用いられているが、移動の終了場所が文脈から明らかであるために省略されている、上記の例 19-22 に類する例だろう。

- (23) 信夫が、中学を出る年であった。大阪から、従兄の隆士が遊びに来た。  
(『塩狩峠』127)
- (24) 信夫が学校から帰ると、待子がとんできた。(『塩狩峠』113)
- (25) 「離れの雪の間だよね？」  
「そう」  
「じゃ、皆さん、ここから上がってついてきてくださいーい」(『六番目の小夜子』276)
- (26) 学校に入るには、長い坂を登り、橋を渡って正面から入る方法と、駅から一直線に国道の下の川べりを通り、校庭の方からあまり使われていない崖下の細い階段を登っていく方法とがある。(『六番目の小夜子』292)
- (27) 研究所から尾行した、といった。とすれば孝平の日常についてかなり知っていると考えてもいいだろう。一つ向こうのドアから乗るとするのは、いかにもあの女のやりそうなことにも思えた。(『丘の上の向日葵』44)

例 23 は『大阪から 東京(の信夫の家)に くる』と解釈できる。「大阪」において開始され、「東京(の信夫の家)」において終了する移動が示されている。例 24 は『学校から (自分の)家に かえる』と解釈できる。「学校」において開始され、「(自分の)家」において終了する移動が示されている。例 25 は『ここから 座敷に あがる』と解釈できる。「ここ」において開始され、「座敷」において終了する移動が示されている。例 26 は『正面から 学校に はいる』と解釈できる。「正面」において開始され、「学校(の中)」において終了する移動が示されている。例 27 は『一つ向こうのドアから 電車に のる』と解釈できる。「一つ向こうのドア」において開始され、「電車(の中)」において終了する移動が示されている。

第 3 に、移動の目的地を表す「場所」に/へ」が「場所から」と共起している例をあげる。



(28) 「自動車事故だそうですね」

「ええ、自分で運転していた車が谷に落ちたんです。京都の鞍馬から周山街道にむかう途中でです」(『悪霊の午後・上』23)

例 28 では、『鞍馬から 周山街道に むかう』によって、「鞍馬」において開始され、「周山街道」をめざす移動が示されている。『場所①から 場所②に/へ むかう』によっては、場所①において開始され、場所②を目的地とする移動が示される。

第 4 に、移動の開始場所を表す「場所」を「場所」から」と共起している例をみる。

(29) それで、バルバリーゴは、帰宅するのだったら使うのとは反対側の出入口から、元首官邸を出たのだった。(『レパントの海戦』17)

例 29 では、『反対側の出入口から 元首官邸を でのる』によって、より詳細にみると「反対側の出入口」において開始される移動、より大きく見ると「元首官邸」において開始される移動が示されている。『場所①から 場所②を でのる』によっては、具体的には場所①において開始される移動、より大きく見れば場所②において開始される移動が示される。

以上、「場所」から」について、次の用法をみてきた。いずれの用法においても、「場所」から」は移動の開始場所を表している。

(a) 『場所」から ～する』という結合によって、その場所において開始される移動が示される用法 (例 2/13/14 参照)

(b) 『場所①」から 場所②」まで ～する』という結合によって、場所①において開始され、場所②において終了する移動が示される用法 (例 1 参照)

(bc) 『場所①」を 場所②」から 場所③」まで ～する』という結合によって、場所②において開始され、場所③において終了する、場所①において行われる移動が示される用法 (例 5 参照)

(c) 『場所①」から 場所②」を ～する』という結合によって、場所①において開始され、場所②において行われる移動が示される用法 (例 15-18 参照)

(d) 『場所①」から 場所②」に/へ ～する』という結合によって、場所①において開始され、場所②において終了する移動が示される用法 (例 19-22 参照, 例 23-27 は「場所②」に/へ」が省略されている)

(e) 『場所①」から 場所②」に/へ ～する』という結合によって、場所①において開始され、場所②をめざす移動が示される用法 (例 28 参照)

(f) 『場所①」から 場所②」を ～する』という結合によって、具体的には場所①において開始される移動、大きくみれば場所②において開始される移動が示される用法 (例 29 参照)

「場所」から」は、さまざまな移動動詞とともに用いられて、移動の開始場所を表す。「場所」から」はともに用いられる移動動詞に依存せずに文法的意味と

して移動の開始場所を表し、修飾語的・限定語的に移動の開始場所についての情報を与える、ということが出来る。なお、荒(1975)が「起点」と「出発点」とをわけていることを前にみたが、その動詞によって示される移動の開始場所を表すという点は共通しているだろう。

ところで、次の例 30 では、「バス(の中)」において終了する移動と、「バスに のった」後、駅前において開始される移動とが示されている。「駅前から」によって、「バスに のった」後の移動が開始される、という意味が与えられているのである。

- (30) 駅前からバスに乗り、静かな住宅街の入口で降りた。(『幻世の祈り』37)

## 2.2 移動の開始場所を表す「場所を」

今度は、ともに用いられる「場所を」が移動の開始場所を表している動詞をみしてみる。

1.1 でみたように、例 2『食堂から でのる』では、移動の開始場所が「食堂から」によって表されているのに対し、例 3『教室を でのる』では、移動の開始場所は「教室を」によって表されている。つまり、『でのる』の開始場所を表すために、「場所から」が用いられる場合と、「場所を」が用いられる場合の両方がある。

「場所から」によっても、「場所を」によっても移動の開始場所を表すことができる動詞として、『でのる』のほかに、『おりる』『さる』『はいる』などを挙げることができる。

- (13) 走って出てみると、父が車から降りるところだった。(『塩狩峠』32)  
(31) 運転手もタクシーをおりて、彼の背後に立っていた。(『悪霊の午後・上』84)

例 13『車から おりる』では「車から」によって移動の開始場所が表されているのに対し、例 24「タクシーを おりる」では「タクシーを」によって移動の開始場所が表されている。

- (14) 信夫は、三堀峰吉が給料紛失の犯人であることに気づいたが、三堀という人間が、このまま職場から去るのは憐れに思われた。(『塩狩峠』268)  
(32) 自分が札幌を去っても、ふじ子はここにこうして、ただ寝ているより仕方がないのだと思うと、ただちに転勤を告げることはできなかった。(『塩狩峠』294)

例 14『職場から さる』では「職場から」によって移動の開始場所が表されているのに対し、例 32「札幌を さる」では「札幌を」によって移動の開始場所が表されている。

- (26) 学校に入るには、長い坂を登り、橋を渡って正面から入る方法と、駅から一直線に国道の下の川べりを通り、校庭の方からあまり使われてい

ない崖下の細い階段を登っていく方法とがある。(『六番目の小夜子』292)

- (33) マンションの玄関を入って二人はエレベーターの前に立った。(『悪霊の午後・上』118)

例 26『正面から はいる』では「正面から」によって移動の開始場所が表されているのに対し、例 33『玄関を はいる』では「玄関を」によって移動の開始場所が表されている。

『はなれる』も、「場所から」「場所を」両方によって移動の開始場所を表すことができる動詞である。

- (34) 涼之助は慌てて部屋の前から離れた。(『山妣・上』35)

- (35) 三堀の隣人になろうとして、三堀の真の友人になろうとして、ふじ子のいる札幌を離れ、この旭川までやって来た自分を信夫は思った。(『塩狩峠』303)

例 34『部屋の前から はなれる』では、「部屋の前から」が移動の開始場所を表していて、「部屋の前」において開始される移動が示されているのに対し、例 35『札幌を はなれる』では、「札幌を」が移動の開始場所を表していて、「札幌」において開始される移動が示されている。

しかし、例 4『馬見原の前を とおる』例 5『海岸通りを 端から 端まで あるく』例 16『一ツ木通りから TBS のそばを ぬける』にみるように、『とおる』『あるく』『ぬける』とともに用いられている「場所を」は、移動の開始場所ではなく、移動中の場所を表している。『とおる』『あるく』『ぬける』以外にも、3でみるように、ともに用いられる「場所を」が移動中の場所を表す動詞が存在する。つまり、「場所を」が移動の開始場所を表すのか、それとも、移動中の場所を表すのかは、結合相手の移動動詞に依存して決定されるのである。これは結合相手の移動動詞の語彙的意味の特性の現れであると解釈できる。

### 2.3 「場所から」と「場所を」の違い

2.1 でみたように、「場所から」はどのような移動動詞とともに用いられても移動の開始場所を表すのに対し、2.2 でみたように、「場所を」は『でる』『おりる』『さる』『はいる』『はなれる』など特定の動詞とともに用いられた場合に移動の開始場所を表す。例 2『食堂から でのる』は『食堂を でのる』に、例 13『車から おりる』は『車を おりる』に、例 14『職場から さる』は『職場を さる』に、例 26『正面から はいる』は『正面を はいる』に、それぞれ言い換え可能である。また、例 3『教室を でのる』は『教室から でのる』に、例 31『タクシーを おりる』は『タクシーから おりる』に、例 14『札幌を さる』は『札幌から さる』に、例 33『玄関を はいる』は『玄関から はいる』に、例 35『札幌を はなれる』は『札幌から はなれる』に、それぞれ言い換え可能である。

しかし、これらの動詞に関して、「場所から」と「場所を」が、常に相互に

置き換え可能である、というわけではない。例 19『食堂から 廊下に でのる』は『食堂を 廊下に でのる』と言い換えることはできない。例 22『国道から 河原へ(と) おりる』も『国道を 河原へ(と) おりる』に言い換えることはできない。次の例 36『渋谷から 二四六に はいる』も『渋谷を 二四六に はいる』と言い換えることはできない。

(36) 渋谷から二四六に入り、三軒茶屋をすぎるとネオンの数も少なく、街も暗くなった。(『悪霊の午後・上』55)

例 19/22/36 は、どうして「場所」から「場所を」に置き換えることができないのだろうか。

例 19/22/36 には、「場所」に/へ」によって移動の終了場所が明示されているという共通点がある。『場所』から ~する』によって移動の開始が示される場合には、移動の開始とその後の移動が「線」的に表されているのに対し、『場所』を ~する』によって移動の開始が示される場合には、移動の開始、つまり「出発」を移動全体からとりだして「点」的に示している、と考えられる。『場所』に/へ ~する』によって移動の終了が示される場合にも、移動の終了、つまり「到着」を移動全体からとりだして「点」的に示していて、「点」的な「出発」と、「点」的な「到着」という、「二点」を同時に表すことが困難であるからだろう。

それに対して、移動の開始とその後の移動を「線」的に示す『場所』から ~する』は、「線」としての移動表現を完結させるために、移動中の場所、移動の終了場所、移動の目的地のどれかが明らかであるか、それを明示する表現が必要なのである。2.1 の『場所』から ~する』の用法をもう一度振り返ってみる。

(a) 『場所』から ~する』(例 2『食堂から でのる』例 13『車から おりる』例 14『職場から さる』) および (f) 『場所①』から 『場所②』を ~する』(例 29『反対側の出入口から 元首官邸を でのる』) では、移動中の場所、移動の終了場所、移動の目的地を明示する表現が用いられていないが、例 2『食堂から でのる』は「廊下に」、例 13『車から おりる』は「地面に」、例 14『職場から さる』は「職場以外の所に」、例 29『反対側の出入口から 元首官邸を でのる』は「元首官邸の外に」など、移動の終了場所や目的地を容易におぎなうことができる。

また、(b) - (e) では、移動の開始及びその後の移動の「線」的な表現が、移動中の場所、あるいは、移動の終了場所、移動の目的地を明示する表現とくみあわせられることによって、移動を「線」として表している。(b) 『場所①』から 『場所②』まで ~する』(例 1『函館から 小樽まで くる』) では、場所①において開始されてから場所②において終了するまでの移動が示される。

(bc) 『場所①』を 『場所②』から 『場所③』まで ~する』(例 5『海岸通りを 端から 端まで あるく』) では、場所②において開始されてから、場所①において行われ、場所③において終了するまでの移動が示される。(c) 『場所①』から 『場所②』を ~する』(例 15『駅から 川べりを とおる』他) では、場所①において開始されてから、場所②において行われる移動が示される。(d) 『場

所①から 場所②に/へ ～する』(例 19『食堂から 廊下に でのる』他)では、場所①において開始されてから場所②に到着するまでの移動が示される。

(e)『場所①から 場所②に/へ ～する』(例 28『鞍馬から 周山街道に むかう』) 場所①において開始されてから、場所②をめざす移動が示される。

一方、「場所」が用いられて「出発」が「点」的に表されている場合には、その後の移動については言及されないため、移動中の場所、移動の終了場所、移動の目的地の表現をとまなうだけではその後の移動を表すことはできず、出発後の移動を明示したい場合には、たとえば、他の動詞を用いる、という方法がとられる。

(37) 夕方になると菊地はそそくさと会社を出て赤坂におもむいた。(『悪霊の午後・上』223)

(38) エレベーターをおり、がらんとした長い廊下を歩いて自室の扉をあけた。(『悪霊の午後・上』11)

例 37 では、「会社を でて」によって出発が示され、「赤坂に おもむいた」によって出発後の「赤坂」をめざす移動が示されている。例 38 では、「エレベーターを おり」によって出発が示され、「廊下を あるいて」によって出発後の「廊下」における移動が示されている。

あるいは、次の例 39 のように、語彙的意味として方向を表している名詞による表現をとまなう、という方法がとられる。

(39) 門をなかに入り、たまった郵便物を取った。(『幻世の祈り』81)

例 39『門を なかに はいる』では、「門を」が、「出発地点」であり、同時に「外と中との境界」でもある場所を表していて、『門を はいる』によって「外から中への移動」が「出発」として示されている。同時に、語彙的意味として方向を表す「なかに」が、「(外から)中に」という方向における移動であることを示している。

宮島 (1972: 564) は、『でのる』『でてくる』を例に、「「～から」は「でてくる」の形と結びついていることでわかるように、経過に重点をおいた具体的な表現で、「～を」は結果に重点をおいた、より抽象的な表現であるかもしれない。」という位置づけをしているが、これは、「場所」から」が用いられている場合は「線」的な表現であり、「場所」を」が用いられている場合は「点」的な表現であることを、「経過」「結果」というとらえ方をしたのだろう。

### 3 移動中の場所を表す「場所」を」

1 の例 4『馬見原の前を とおる』の「馬見原の前を」、例 5『海岸通りを 端から 端まで あるく』の「海岸通りを」、2.1 の例 16『一ツ木通りから TBS のそばを ぬける』の「TBS のそばを」などですで見たとおり、移動中の場所を表すためには、「場所」を」が用いられる。例 5 は「端から」「端まで」と、例 16 は「一ツ木通りから」と、それぞれ共起しているが、『あるく』『ぬける』

は、移動中の場所を表す「場所」を」のみとともに用いられる場合もある。

(40) 秋陽のまぶしい札幌の町を、信夫は急ぎ足で歩いていた。(『塩狩峠』259)

(41) 急いで中央待ち合い室を抜け、入り口のところに行くと、担架はもう、かつぎこまれたあとだった。(『夏の庭』43)

例40『札幌の町を あるく』では、「札幌の町を」が移動中の場所を表して、「札幌の町」における移動が示されている。例41『中央待ち合い室を ぬける』では、「中央待ち合い室を」が移動中の場所を表して、「中央待ち合い室」における移動が示されている。

以上のほか、「場所」を」が移動中の場所を表している例として、次のようなものをあげることができる。

(42) 色とりどりの傘をさした男女がまるで蟻の行列のように横断歩道をわたり尾張町の方向にすすんでいく。(『悪霊の午後・上』9)

(43) アカシアの並木をしばらく行って左に曲がると、  
「その三軒目(けんめ)の家だよ」

と、吉川がアゴでさし示した。(『塩狩峠』231)

(44) 受付でいわれた通りに廊下をすすむと、すぐ人の通りは減って、内科の受付に出た。(『丘の上の向日葵』285)

(45) 返事がない。二階にもいそうもないが、気持ちのせくままに階段をあがった。(『丘の上の向日葵』197)

(46) 容子が珍しくバテ気味で階段を登っている。(『六番目の小夜子』57)

例42『横断歩道を わたる』では、「横断歩道を」が移動中の場所を表して、「横断歩道」における移動が示されている。例43『アカシアの並木を いく』では、「アカシアの並木を」が移動中の場所を表して、「アカシアの並木」における移動が示されている。例44『廊下をすすむ』では、「廊下を」が移動中の場所を表して、「廊下」における移動が示されている。例45『階段を あがる』では、「階段を」が移動中の場所を表して、「階段」における移動が示されている。例46『階段を のぼる』では、「階段を」が移動中の場所を表して、「階段」における移動が示されている。

ところで、2.2 でみた例31『タクシーを おりる』では、「タクシーを」が「出発地点」を表して、「タクシー」において開始される移動が示されていた。ところが次の例47『階段を おりる』では、「階段を」が移動中の場所を表して、「階段」における移動が示されている。「場所」を」によって示される場所において移動が行われるという点は例4/5/16/40-46と共通している。

(47) 二階の廊下でまた声をあげた。「すみませーん」

誰もいなかった。「これで管理人といえるかよ」と憎まれ口をききながら階段をおりた。(『丘の上の向日葵』197)

『場所」を おりる』が、その場所からの出発を表すのか、それとも、その場

所における移動を表すのかは、「タクシー」(乗物)か、それとも、「階段」(径路・通路)か、という、「場所」を」として用いられる名詞の種類の違いに依存している。

この『場所』を おりる』の場合をのぞけば、『場所』を ～する』が、ある場所からの出発を表すのか、それとも、ある場所における移動を表すのかは、2.2で考察したように、結合相手の移動動詞に依存して決定されている。2.2でとりあげた、例3『教室を でのる』例32『札幌を さる』例33『玄関を はいる』例35『札幌を はなれる』では、結合相手である『でのる』『さる』『はいる』『はなれる』に依存して、「場所」を」の「出発地点」という文法的意味が決定されているのに対し、ここでとりあげた、例4『馬見原の前を とおる』例5『海岸通りを 端から 端まで あるく』例40『札幌の町を あるく』例16『一ツ木通りから TBS のそばを ぬける』例41『中央待ち合い室を ぬける』例42『横断歩道を わたる』例43『アカシアの並木を いく』例44『廊下を すすむ』例45『階段を あがる』例46『階段を のぼる』では、結合相手である『とおる』『あるく』『ぬける』『わたる』『いく』『すすむ』『あがる』『のぼる』に依存して、「場所」を」に移動中の場所という文法的意味が決定されている。いわば、結合相手である移動動詞が、「出発地点」あるいは移動中の場所という文法的意味を、「場所」を」に与えている。これはその動詞の語彙的意味の特性の現れである、と解釈できる。

さて、『場所①』を 場所②』に/へ ～する』によって、場所①において移動が行われ、場所②に到着することを表すのは困難だろう。次の例48-49では、場所名詞ではなく方向を表す名詞(句)が「〇〇に」という形式で用いられている。

- (48) 「この奥を 芹生の里のほうに 行ってください」(『悪霊の午後・上』80)  
 (49) 二つ先の駅に行く道はいくつかあったが、常識的には駅前に出て陸橋を渡り、大きな団地脇を西に進むことになる。(『丘の上の向日葵』253)

例48『この奥を 芹生の里のほうに いく』では、「この奥」において「芹生の里のほうに」という方向で行われる移動が示されている。例49『団地脇を 西に すすむ』では、「団地脇」において「西に」という方向で行われる移動が示されている。

2.3では、『場所①』を 場所②』に/へ ～する』によって出発と到着を同時に示すことがないのは、『場所』を ～する』は移動の開始である「出発」を「点的」に表し、『場所』に/へ ～する』は移動の終了である「到着」を「点的」に表すためであることを考察した。『場所①』を 場所②』に/へ ～する』によって、場所①において移動が行われて場所②に到着することを表すのが困難であるのは、このような『場所』を ～する』が、ある場所において行われる移動、すなわち、ある場所を「経由」することを、移動全体からとりだして「点的」に表して、「経由」と「到着」という「二点」を同時に表すことが困難であるからだろう。

ところで、「経由地点」を表す『場所』を」について、奥田(1968-72)が「うつりうごくところ」「とおるぬけるところ」という下位分類をおこなっている

ことを前にみた。どちらも「経由地点」が表されているという点は共通している。「場所」を「」によって「経由地点」が表される場合の下位分類については、今後の課題としたい。

#### 4 移動の終了場所を表す「場所まで」と「場所に/へ」

1 では、「場所まで」「場所に/へ」という2種類の格が移動の終了場所を表すことをみた。移動の開始場所が、「場所まで」によって表される場合と、「場所に/へ」によって表される場合には、どのような違いがあるだろうか。

##### 4.1 移動の終了場所を表す「場所まで」

まず、ともに用いられる「場所まで」が移動の終了場所を表している動詞をみしてみる。

1 の例1『函館から 小樽まで くる』例5『海岸通りを 端から 端まで あるく』例6『桜の木の下まで いく』では、『くる』『あるく』『いく』とともに用いられている「場所まで」が移動の終了場所を表している。「場所まで」は、他に、どのような動詞とともに用いられる場合に移動の終了場所を表すのだろうか。

- (50) この天気の下、しかも夜になって、あとひとまたぎで埼玉県になるという葛飾区のこのあたりを訪ね、さらに千葉の西船橋まで帰るとなると、これは大仕事になる。(『火車』14)
- (51) 駒田が口のなかで何やら文句を言ったようだったが、あえて聞こえないふりをして、少女の前まで進み、  
「大丈夫？ どこか痛い」  
彼女と同じ目の高さになって訊ねた。(『幻世の祈り』18)
- (52) 平生は滅多にこの部屋には人を入れなかったが、今日はわざわざロビーまでおりるのが面倒くさかった。(『悪霊の午後・上』63)
- (53) 「じゃ八階まで階段で登るわけ？」(『雲の宴・上』16)
- (54) 十時すぎに家のある駅におり、広場まで出て孝平は、暫く立ち止まった。(『丘の上の向日葵』50)

例50『西船橋まで かける』では、「西船橋まで」が移動の終了場所を表していて、「西船橋」において終了する移動が示されている。例51『少女の前まで すすむ』では、「少女の前まで」が移動の終了場所を表していて、「少女の前」において終了する移動が示されている。例52『ロビーまで おりる』では、「ロビーまで」が移動の終了場所を表していて、「ロビー」において終了する移動が示されている。例53『八階まで のぼる』では、「八階まで」が移動の終了場所を表していて、「八階」において終了する移動が示されている。例54『広場まで である』では、「広場まで」が移動の終了場所を表していて、「広場」において終了する移動が示されている。

以上、例1/5/6/50-54で、『場所まで ~する』(例1/5では他の格の場所名詞と共に)が、その場所において終了する移動を示す例をみってきた。「場所ま



で」は、『あるく』『くる』『いく』『かえる』『すすむ』『おきる』『のぼる』『でる』とともに用いられる場合に、移動の終了場所を表す。

#### 4.2 移動の終了場所を表す「場所」に/へ」

今度は、結合相手の「場所」に/へ」が移動の終了場所を表している動詞を試してみる。

1の例7『おじいさんの家に いく』例8『島に つく』例9『教会へ いく』例10『研究所へ つく』において、「場所」に/へ」が移動の終了場所を表している。「場所」に/へ」が『いく』『つく』以外の動詞とともに用いられて移動の終了場所を表す例をあげる。

- (55) 「永野、北海道に来て君は感傷的になっているんだ」(『塩狩峠』245)
- (56) 就職したばかりで、二、三年で東京に帰るとは言いかねた。(『塩狩峠』238)
- (57) 馬見原は、無造作に靴を脱いで上がり、居間へ進んだ。(『幻世の祈り』84)
- (58) 洋服を着かえ、部屋を出てロビーにおりるとすでに府中や英子や出迎えに来てくれた男が立っていた。(『悪霊の午後・上』107)
- (59) 冴子は人気のない超高層ビルの最上階に登ると、深夜営業の喫茶店に入り、窓際の席に坐った。(『雲の宴・上』394)
- (60) 全員は、いわれたとおりに机の中に給料を入れた。そして、和倉一人が部屋に残り、全員は廊下に出た。(『塩狩峠』267)
- (61) こういうことがあるんだよなあ、と千円札を出しながら厚生棟に入り、くずして貰おうと管理室をのぞくと、中年女性の管理人工藤さんの姿がない。(『丘の上の向日葵』197)
- (62) 菊地はエレベーターにのって、教えられた階でおりた。(『悪霊の午後・上』172)
- (63) 翌朝、信夫は三堀峰吉の家を訪ねた。峰吉は眠い目をこすりながら、ふきげんな顔で起きてきた。しかし信夫はかまわずに、自分から進んで茶の間に上がり、峰吉とその母を前に言葉を切った。(『塩狩峠』277)
- (64) 食事が終わると、女たちは茶の間に移った。(『塩狩峠』228)

例55『北海道に くる』では、「北海道に」が移動の終了場所を表していて、「北海道」において終了する移動が示されている。例56『東京に かえる』では、「東京に」が移動の終了場所を表していて、「東京」において終了する移動が示されている。例57『居間へすすむ』では、「居間へ」が移動の終了場所を表していて、「居間」において終了する移動が示されている。例58『ロビーに おきる』では、「ロビーに」が移動の終了場所を表していて、「ロビー」において終了する移動が示されている。例59『最上階に のぼる』では、「最上階に」が移動の終了場所を表していて、「最上階」において終了する移動が示されている。例60『廊下に でのる』では、「廊下に」が移動の終了場所を表していて、「廊下」において終了する移動が示されている。例61『厚生棟に はいる』では、「厚生棟に」が移動の終了場所を表していて、「厚生棟」において終了する移動が示されている。例62『エレベーターに のる』では、「エレベ

ーターに」が移動の終了場所を表して、「エレベーター」において終了する移動が示されている。例 63『茶の間に あがる』では、「茶の間に」が移動の終了場所を表して、「茶の間」において終了する移動が示されている。例 64『茶の間に うつる』では、「茶の間に」が移動の終了場所を表して、「茶の間」において終了する移動が示されている。

以上、例 7-10/55-64 で、『場所』に/へ ～する』が、その場所において終了する移動を示す例をみてきた。『場所』に/へ』は、『いく』『つく』『くる』『かえる』『すすむ』『おりる』『のぼる』『でる』『はいる』『のる』『あがる』『うつる』とともに用いられる場合に、移動の終了場所を表す。

### 4.3 「場所まで」と「場所に/へ」の違い

4.1 では、『場所』まで』が『あるく』『くる』『いく』『かえる』『すすむ』『おりる』『のぼる』『でる』とともに用いられて移動の終了場所を表すことを、4.2 では、『場所』に/へ』が『いく』『つく』『くる』『かえる』『すすむ』『おりる』『のぼる』『でる』『はいる』『のる』『あがる』『うつる』ともに用いられて移動の終了場所を表すことをみてきた。『場所』まで』が移動の終了場所を表す場合と、『場所』に/へ』が移動の終了場所を表す場合の違いを考察してみたい。

まず、『場所』まで』と『場所』に/へ』の置き換え可能性を検討してみると、次のようになる。

(α) 例 5『海岸通りを 端から 端まで あるく』は『海岸通りを 端から 端に あるく』に言い換えることができない。

『あるく』の終了場所を表すためには『場所』まで』が用いられる。

(β) 例 1『函館から 小樽まで くる』は『函館から 小樽に/へ くる』に、例 6『桜の木の下まで いく』は『桜の木の下に/へ いく』に、例 50『西船橋まで かえる』は『西船橋に/へ かえる』に、例 51『少女の前まで すすむ』は『少女の前に/へ すすむ』に、例 52『ロビーまで おりる』は『ロビーに/へ おりる』に、例 53『八階まで のぼる』は『八階に/へ のぼる』に、言い換えることができる。

一方、例 7『おじいさんの家に いく』例 9『教会へ いく』は『おじいさんの家まで いく』『教会まで いく』に、例 55『北海道に くる』は『北海道に くる』に、例 56『東京に かえる』は『東京まで かえる』に、例 57『居間へ すすむ』は『居間まで すすむ』に、例 58『ロビーに おりる』は『ロビーまで おりる』に、例 59『最上階に のぼる』は『最上階まで のぼる』に、言い換えることが可能である。

『いく』『くる』『かえる』『すすむ』『おりる』『のぼる』の終了場所を表すためには『場所』まで』『場所』に/へ』どちらも用いられうる。

(γ) 例 54『広場まで でる』は『広場に/へ でる』に言い換えることができる。しかし、例 60『廊下に でる』は『廊下まで でる』に言い換えることができない。

『でる』は、用法によって、終了場所を表すために『場所』まで』『場所』に/へ』どちらも用いられうる場合と、『場所』に/へ』のみが用いられる場合がある。

(δ) 例 8『島に つく』例 10『研究所へ つく』は『島まで つく』『研究

所まで つく』に、例 61『厚生棟に はいる』は『厚生棟まで はいる』に、例 62『エレベーターに のる』は『エレベーターまで のる』に、例 63『茶の間に あがる』は『茶の間まで あがる』に、例 64『茶の間に うつる』は『茶の間まで うつる』に、言い換えることができない。

『つく』『はいる』『のる』『あがる』『うつる』の終了場所を表すためには「場所」に/へ」が用いられる。

「場所まで」は、結合可能である移動動詞とともに用いられれば、移動の終了場所を表す。「場所」は、結合相手の移動動詞に依存せずに、移動の終了場所を文法的意味として表して、修飾語的・限定語的に移動の終了場所についての情報を動詞に与える、ということができる。荒 (1977) が「終点」と「ゆくさき」の区別をおこなっていることは前にみたが、その動詞によって示される移動が「場所まで」によって示される場所において終了するという点は共通しているだろう。

次の例 65『どこまでも どこまでも のる』は、『電車に のる』によって示される、「電車(の中)への移動」の後の移動を示すために用いられている。これは「どこまでも どこまでも」が、『のる』に、「電車(の中)への移動」の後の移動という意味を与えているのである。

- (65) ただ行き当たりばったりに電車に乗り、とにかくどこまでもどこまでも乗り、行き当たりばったりの駅で降りる。(『ポプラの秋』11)

「場所まで」と異なり、「場所」に/へ」には、特定の動詞と用いられて移動の終了場所を表す用法のほか、1 の例 11『宿に むかう』例 12『流し台へ むかう』にみるように、『むかう』など特定の動詞とともに用いられて、そこをめざして移動する目的地を表す用法がある。つまり、移動の終了場所を表すか、それとも、移動の目的地を表すか、という「場所」に/へ」の文法的意味は、結合相手の移動動詞に依存して決定されるのである。これはその動詞の語彙的意味の特性の現れである、と解釈できる。

次に、「場所まで」「場所」に/へ」どちらも結合しうる動詞の用法に基づいて、「場所まで」と「場所」に/へ」の違いを考察してみる。

以下の2つの例では、移動の途中で何らかの事態が生じたことが示されているが、その場所を示すために「場所まで」が『いく』『くる』とともに用いられている。

- (66) ぼくの足は勝手にそのおばさんのところまで行くと、ぴたりと止まった。(『夏の庭』43)

- (67) 赤煉瓦で有名な興農社の所までくると、何か大声が聞こえた。みると、一人の男が外套も着ないで、大声で叫んでいる。(『塩狩峠』269)

例 66 では、移動の途中、「おばあさんのところ」において、足が「とまった」ことが示されている。例 67 では、移動の途中、「興農社の所」において、一人の男が「大声で叫んでいる」ことが示されている。これは、「場所まで」が用

いられた場合には、移動を「線」的にとらえ、その区切りとして移動の終了場所を表しているためだろう。例 66「そのおぼさんのところまで いくと」を「そのおぼさんのところに いくと」に、例 67「興農社の所まで くと」を「興農社の所に くと」に、それぞれ置き換えると、移動の途中で何らかの事態が生じたことではなく、移動が終了した後何らかの事態が生じたことを示すようになる。

一方、「場所」に/へ」について、2.3 で『場所①』を 場所②』に/へ ～する』によって移動の開始と終了を同時に表すのが困難であることを、3 で『場所①』を 場所②』に/へ ～する』によって移動中であることと移動の終了を同時に表すのが困難であることをみ、「場所」を」が移動の開始場所を表す場合には移動全体から「出発」をとりだして、「場所」を」が移動中の場所を表す場合には移動全体から「経由」をとりだして、「場所」に/へ」が移動の終了場所を表す場合には移動全体から「到着」をとりだして、それぞれ「点」的に表しているためであることを考察してきた。

「場所」まで」が用いられている場合には終了に至るまでの移動を「線」的にとらえていること、「場所」に/へ」が用いられている場合には移動全体から「到着」を「点」的にとりだしていることは、次の2例の対比によっても明らかになる。

(68) でも、どこまで行っても水平線にたどりつくことなんか、できっこないのだ。(『夏の庭』170)

(69) どこにいても、体臭に似た、すっぱいような臭いが漂っていた。(『雲の宴・下』31)

例 68「どこまで いても」が、移動が進行していく途中のどんな場所においても、ということを表していて次の例 70「いけども いけども」と同じことが示されているのに対し、例 69「どこに いても」は、どんな場所にも移動してもその終了場所においては、ということを表している。

(70) 「楓のような赤ではなくて、公孫樹のように黄色い方がいいの。行けども行けども樹という樹が黄色く輝いて、地面も黄色く遠くまで広がって明るくて——」(『丘の上の向日葵』325)

移動の終了場所を表すために「場所」まで」が用いられる移動動詞は、終了にいたる移動を「線」的に表す動詞である。移動の終了場所を表すために「場所」に/へ」が用いられる移動動詞は、移動の終了である「到着」をきりとして「点」的に表す動詞である。「場所」まで」 「場所」に/へ」両方が用いられる動詞は、終了にいたる移動を「線」的に表すことも、「到着」をとりだして「点」的に表すこともできる動詞である。『でる』の用法についていえば、『広場に でる』と言い換え可能な例 54『広場まで でる』が、終了にいたる移動を「線」的に表して、「到着」をとりだして「点」的に表せば『広場に でる』という表現になるのに対し、例 60『廊下に でる』は、もともと「点」的にしか表せない移動が示されているのである。ここには、移動の開始場所と終了場

所が境界をはさんで接しているという現実の要因が関係しているのだろう。

## 5 移動の目的地を表す「場所」に/へ」

1 および 4.3 で考察したように、例 11『宿に むかう』例 12『流し台へ むかう』の「宿に」「流し台へ」は、そこをめざして移動する、という移動の目的地を表して、「場所」に/へ」の移動の目的地という文法的意味は、結合相手である『むかう』に依存して決定されているのである。

移動動詞と結合し、移動の目的地を表している「場所」に/へ」の例をあげる。

- (71) 夕方になると菊地はそそくさと会社を出て赤坂におもむいた。(『悪霊の午後・上』223)
- (72) 次第に河に近づくにつれて、照美は意外なことに気づいた。(『裏庭』50)
- (73) 京都のビジネスホテルに投宿した菊地は仕事関係の用事をすますとその日の夕暮、南条の事故があった場所に出かけることにした。(『悪霊の午後・上』79)

例 71『赤坂に おもむく』では、「赤坂に」が移動の目的地を表して、「赤坂」をめざす移動が示されている。例 72『河に ちかづく』では、「河に」が移動の目的地を表して、「河」をめざす移動が示されている。例 73『南条の事故があった場所に でかける』では、「南条の事故があった場所に」が移動の目的地を表して、「南条の事故があった場所」をめざす移動が示されている。『むかう』の場合同様、『おもむく』『ちかづく』『でかける』とともに用いられている「場所」に/へ」の移動の目的地という文法的意味は、その動詞に依存して決定されている。これは、これらの動詞の語彙的意味の特性の現れであると解釈できる。

## 6 まとめ

今までの考察に基づいて、移動動詞とともに用いられる場所名詞の格について、そして、その移動動詞の語彙的意味の特性について、まとめてみる。(動詞は引用順、動詞の後ろの数字は用例番号；※は転義の例)

### 6.1 移動の開始場所を表す格

i) 「場所」からは、『くる』(1/21/23)『でる』(2/19/29)『あるく』(5)『おりる』(13/17/22)『さる』(14)『とおる』(15)『ぬける』(16)『くだる』(18)『わたる』(20)『かえる』(24)『あがる』(25)『はいる』(26/36)『のる』(27/30)※『むかう』(28)『はなれる』(34)など、さまざまな動詞とともに用いられて、移動の開始場所を表す。開始後の移動は線的にとらえられている。これは「場所」から」が、結合相手の移動動詞に依存せず持っている文法的意味であって、修飾語的・限定語的に、その動詞に移動の開始場所の情報を付加する。

ii) 「場所」を」は、『でる』(3/29/37)『おりる』(31/38)『さる』(32)『はいる』(33/39)『はなれる』(35)などの動詞とともに用いられて、出発地点を表す。

「場所を」の出発地点という文法的意味は、結合相手の移動動詞によって決定されるものである。これらの動詞は、いわば、「場所を」に出発地点という文法的意味をあたえるのである。これは、これらの動詞の語彙的意味の特性の現れである。

## 6.2 移動中の場所を表す格

「場所を」は、『とおる』(4/15)『あるく』(5/40)『ぬける』(16/41)『おりる』(17/47)『くだる』(18)『わたる』(42)『いく』(43/48)『すすむ』(44/49)『あがる』(45)『のぼる』(46)などの動詞とともに用いられて、経由地点を表す。

「場所を」の経由地点という文法的意味は、結合相手の移動動詞によって決定されるものである。これらの動詞は、いわば、「場所を」に経由地点という文法的意味をあたえるのである。これは、これらの動詞の語彙的意味の特性の現れである。

## 6.3 移動の終了場所を表す格

i) 「場所まで」は、『くる』(1/67)『あるく』(5)『いく』(6/66/68)『かえる』(50)『すすむ』(51)『おりる』(52)『のぼる』(53)『でる』(54)『のる』(65※)などの、終了にいたる移動を線的にとらえる動詞とともに用いられて、移動の終了場所を表す。これは「場所まで」が結合相手の移動動詞に依存せずに持っている文法的意味であって、修飾語的・限定語的に、その動詞に移動の終了場所の情報を付加する。

ii) 「場所に/へ」は、『いく』(7/9/69)『つく』(8/10)『でる』(19/60)『わたる』(20)『くる』(21/55)『おりる』(22)『のる』(30※/62)『はいる』(36/61)『かえる』(56)『すすむ』(57)『おりる』(58)『のぼる』(59)『あがる』(63)『うつる』(64)などの動詞とともに用いられて、到着地点を表す。「場所に/へ」の到着地点という文法的意味は、結合相手の移動動詞によって決定されるものである。これらの動詞は、いわば、「場所に/へ」に到着地点という文法的意味をあたえるのである。これは、これらの動詞の語彙的意味の特性の現れである。

## 6.4 移動の目的地を表す格

「場所に/へ」は、『むかう』(11/12/28)『おもむく』(71)『ちかづく』(72)『でかける』(73)などの動詞とともに用いられて、移動の目的地を表す。「場所に/へ」の移動の目的地という文法的意味は、結合相手の移動動詞によって決定されるものである。これらの動詞は、いわば、「場所に/へ」に移動の目的地という文法的意味をあたえるのである。これは、これらの動詞の語彙的意味の特性の現れである。

### [参照文献]

- 荒正子 (1975) 「から格の名詞と動詞とのくみあわせ」言語学研究会編 (1983) 『日本語文法・連語論 (資料編)』397-435. 東京: むぎ書房。  
—— (1977) 「まで格の名詞と動詞とのくみあわせ」言語学研究会編 (1983) 『日本語文法・連語論 (資料編)』455-471. 東京: むぎ書房。  
奥田靖雄 (1962) 「に格の名詞と動詞とのくみあわせ」言語学研究会編 (1983) 『日本

- 語文法・連語論 (資料編)』281-323. 東京: むぎ書房.  
—— (1968-72) 「を格の名詞と動詞とのくみあわせ」言語学研究会編 (1983) 『日本語文法・連語論 (資料編)』21-149. 東京: むぎ書房.  
城田俊 (1981) 「格助詞の意味」京都大学『国語国文』50(4): 43-56.  
寺村秀夫 (1982) 『日本語のシンタクスと意味 I』東京: くろしお出版.  
宮島達夫 (1972) 『動詞の意味・用法の記述的研究』東京: 秀英出版.  
村木新次郎 (1991) 『日本語動詞の諸相』東京: ひつじ書房.  
渡辺友左 (1963) 「へ格の名詞と動詞とのくみあわせ」言語学研究会編 (1983) 『日本語文法・連語論 (資料編)』341-352. 東京: むぎ書房.

【用例出典】

遠藤周作『悪霊の午後・上』講談社文庫／恩田陸『六番目の小夜子』新潮文庫／辻邦生『雲の宴・上/下』朝日文庫／天童荒太『幻世の祈り』新潮文庫／梨木香歩『裏庭』新潮文庫／坂東眞砂子『山妣・上』新潮文庫／三浦綾子『塩狩峠』新潮文庫／宮部みゆき『火車』新潮文庫／山田太一『丘の上の向日葵』新潮文庫／湯本香樹実『夏の庭』『ポプラの秋』新潮文庫

## The Verbs of Movement and the Cases for the Locative Nouns in Modern Japanese

Yukihiko OKADA

In modern Japanese, “PLACE-*kara*” (*Hakodate-kara kuru*) and “PLACE-*o*” (*kyoositu-o deru*) refer to the place where the relevant movement starts, “PLACE-*o*” (*kaigaNdoori-o aruku*) refers to the place in which the movement is being made, “PLACE-*made*” (*Otaru-made kuru*) and “PLACE-*ni/e*” (*ie-ni/e iku*) refer to the place where the movement ends, and “PLACE-*ni/e*” (*yado-ni/e mukau*) refer to the potential destination. What kind of the interrelationship is seen between the cases of nouns denoting place, and what kind of features of lexical meaning of verbs denoting movement reveals themselves from these grammatical facts?

“PLACE-*kara*” denotes the starting place of movement and the course of its movement is interpreted as a “line”, independently of the verbs co-occurring with the noun. “PLACE-*o*” denotes the starting point or the point passed, depending on the verbs co-occurring with the noun, and the starting or the passing involved is interpreted as a “point”, that is “momentary”; this fact reveals a feature of lexical meaning of the verbs. “PLACE-*made*” denotes the ending place of movement and, when co-occurring with the verbs denoting movement, interpreted as a “line”. “PLACE-*ni/e*” denotes the reaching point (where the arrival is interpreted as a “point”) or a “potential destination”, depending on the verbs co-occurring with that noun; this fact also reveals a feature of lexical meaning of the verbs.

Key words: verbs of movement, locative nouns, cases